くすりの歴史

——その使用価値の考察——

安江政一

医薬品とは何かを厳密に定義することは困難である。宮木は著書『薬学概論』(一九七七)において薬事法、WHOおよび辰野の定義に彼自身の考えも加えて、四通りの定義を掲げ、その中で辰野のいう「薬は交換価値をもつ」という一句をとりあげ、経済に注目したものとして高く評価している。しかし、そこから薬の社会における特異性を引き出していないから、薬も商品であることを指摘したに止まり、論理の発展のないままに終った。

薬の起原は祭の供物および食物探究における経験などであろう。古代の薬には呪術的要素が大きい。古事記にみられるわが国最古の治療記録、大国主の説話では、薬は焼死者や全身の傷を一挙に元通りに復元する神通力の担い手である。インドの錬金術における換金薬の液体と軌を一にしている。

経験から自然界に病気をなおすもののあることを知ると、「百章を嘗めて……」というように、何かを目安に薬を求めた。その目安の一つに外形があった。中国では人体の形をした朝鮮人参が、西欧では同様なマンドラゴラが全身に有効な万能薬として珍重された。後者はアルカロイドを含んでいるためすたれたが、朝鮮人参は現在でもわが国、韓国、中国、ソビエトで用いられている。

中世も半ばを過ぎると、観察と経験が深まり、病因論や治療の実際論がいくつも出された。中でも偉大な医師であり科学者であったパラケルススは多くの薬物療法を発明した。その中の一つに武器軟膏がある。刀傷の治療において薬を、傷にではなく、その傷を作った刀に塗るというものである。いかなる偉人でも時代を超越することはできない。中世の迷妄の中にあって、彼の言行の中に荒唐無稽のものがあったとしても、彼の多くの科学的功績を否定するものではない。

フランスの医師メスメルは、磁石の神秘的な力を天体間の引力に関係づけ、宇宙に充満する不可知の流体を通して

惑星の動きが人体に影響を及ぼすから、その干満を巧に利用すれば病気は治療できると主張した。パリ科学アカデミーは委員会を作って調査したが、結果はメスメルに不利であった。それでも施術による治癒のあり得ることを付言した。プラセボ効果の公的な承認といえよう。

現代の新薬開発研究では、臨床実験は二重盲検法によって、プラセボ効果は除去される。それ故新しい医薬品は治療効果の物質的担い手となった。しかしこれは研究面でのことであって、一般社会において薬が使用される場合は、そうではない。

いま、人間に生物として本来そなわっている自然治癒力をNとし、プラセボ効果をP、薬効をE、好ましくない副作用をSとすれば、治療効果Cは次式で表わされる。

$$C = N + P + E - S$$

薬の使用価値はききめである。ききめは本来Eでなければならないが、治療の現場ではCと判断されがちである。NとPの存在を知っていても、それを実際に臨んで量的に判断することは不可能である。薬の交換価値は、その製造と輸送などの社会的労働の総和であって、使用価値のききめとは無関係である。使用価値は時には生命をとり止める程無限大ともなれば、時にはただの異物のこともあり得る。さらに一般の病気は放置しておいても治癒するのが普通である。にもかかわらず薬を使う実際面ではその真の効果はNとPに隠蔽されて医師にも患者にも判然としないのである。この点こそ薬が発生してから今日まで、社会において持ち続けてきた特異性、使用価値の隠蔽性なのである。

（新潟薬科大学名誉教授）